神社
大和路便覽
一名芳山花栞
全
1187

ル84
1187

袖珍
大和路便覧 全
一名 芳山花栞

京より大和巡り道中名所指南宇治木津路及八幡より歌姫越
附伏見より浪華迄船中両岸地名並高野街道野崎観音みち
大坂堺より河州名所和哥之浦高野山より和州五条迄路程大略
奈良より吉野迄名所古蹟畧記　大和國中指掌図
吉野名所案内大概吉野山詩歌　同一望之図芳山花時考

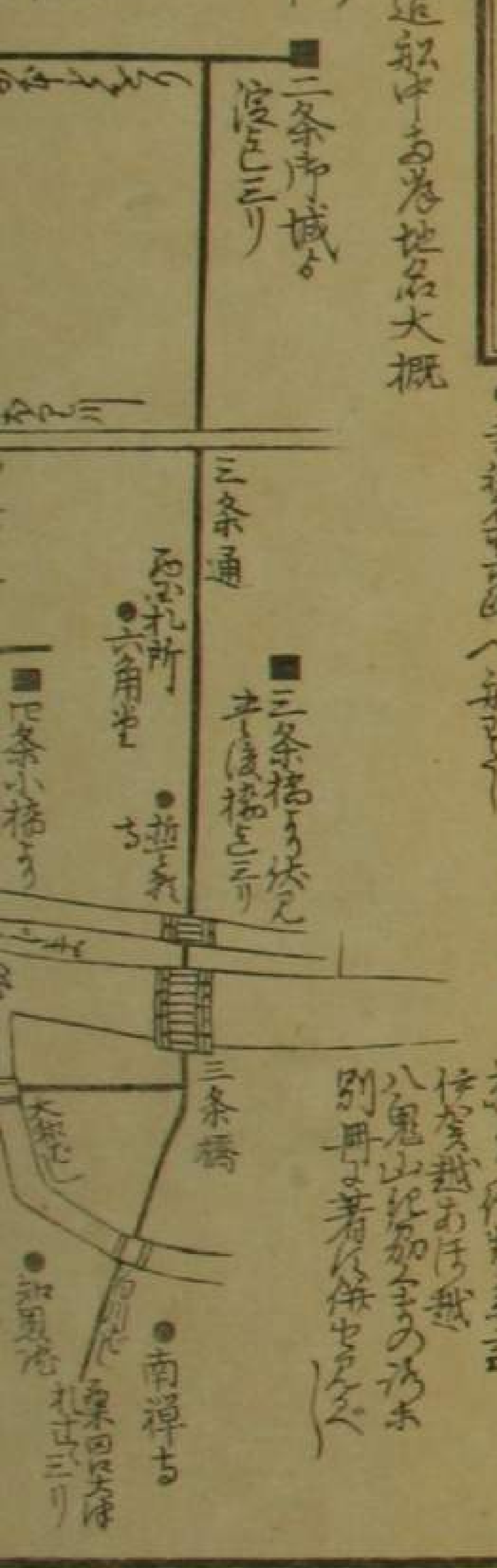
菖蒲やさかの波乃花とはおどろかされて一都表月出入なくまゝ
まことに待ちわびし浪華の書肆積玉圃のあるじかねてより京より
なにはより吉野に以まうでんとの志もあるにかくもてるときき
神武の帝をはじめ代々の帝おはしましし宮乃あとも元弘延元乃古
事なども何くれと尋ねまゐらせ度ねと不知(イサ)とのみ
答給ふそれより事とて懐よりとうでてみせらるゝは此
頃出版せしものにて此度芳山花栞と云ふもので此山の道筋
あるは大和路をめぐる川いて入しれぬ所々も悉く古跡名所を
花もみちも志るべし芳野の所まで京よりの図し古を
侍へいさゝか遊らしとよくみしまゝ人のしと筆庵も和もいまゝ人

とふらふね嬉しくて心あるにもなかなんとやとくに便あらし
これはたぬ人は是をみらくおのれひとり遊くなる人は雅び遊ん乃
歌ひとつもなきし行んやまてこん善とやつききまくもかしこくよ
大宰の大原さちまの院乃新殿に下るを尋ねて御帳ひらきの
まゐらせ出でわつかさ女八あつの葉のちりゆ紀山路をのぼり老ますら
その子八杖にすかりて拾ひなげきにもこれはまことにやさ
侍らんいさとく櫻木に上りて四方に目をとめぬへそのみの功徳に
こそと我方さまよりも引入まゐらせてそのうききにゆえはさてはやりて
是結ひとしてまことに色よそ手に一云をうなかけ侍るは吉野紙櫻のことに
志るべくなるねの芳を離れ旅る霞居のあるし云く

京より大和巡り道筋名所指南

■出口　▲國境　━町或ハ村 宿ホの類　□城下 又陣屋

附伏見より大坂迄船中両岸地名大概



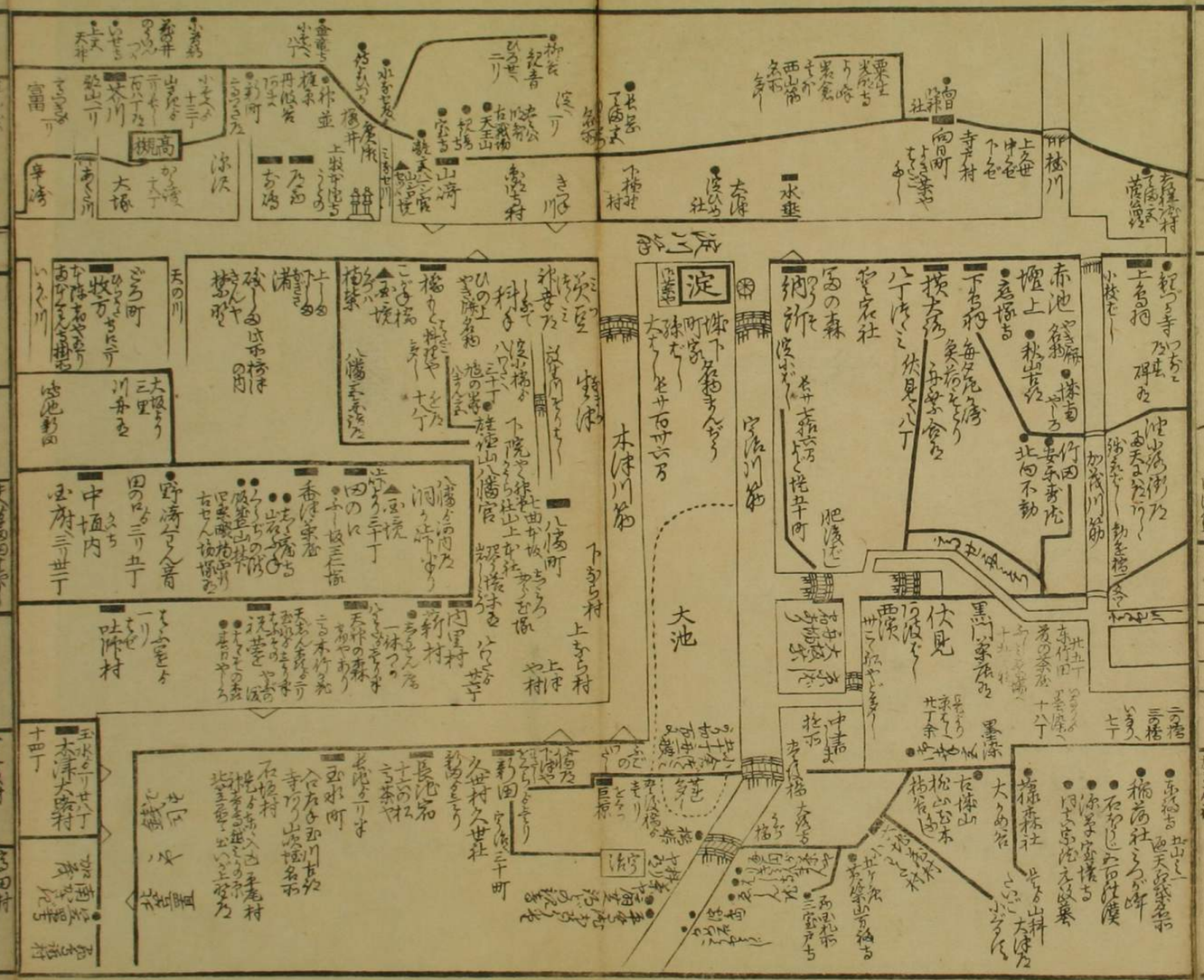
京より大和巡り道筋名所指南

附伏見より大坂迄船中名所概

先八幡山より
宇治越南都
ホしの京四り

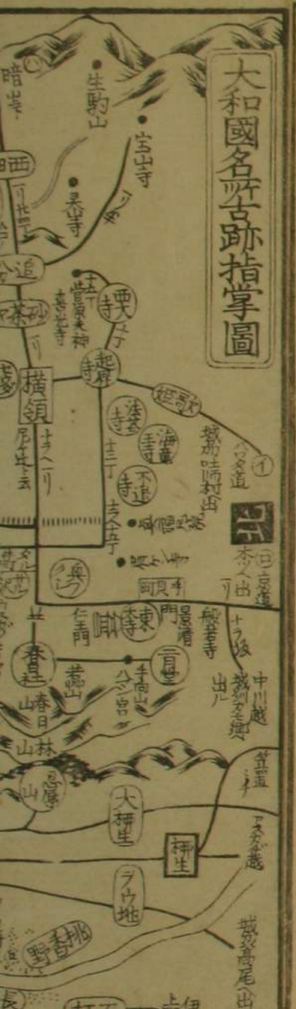
大坂堺名所
名所より竹内
当麻越まつか
本街道ハ竹内
和泉の国へ出る
とゝ記ス

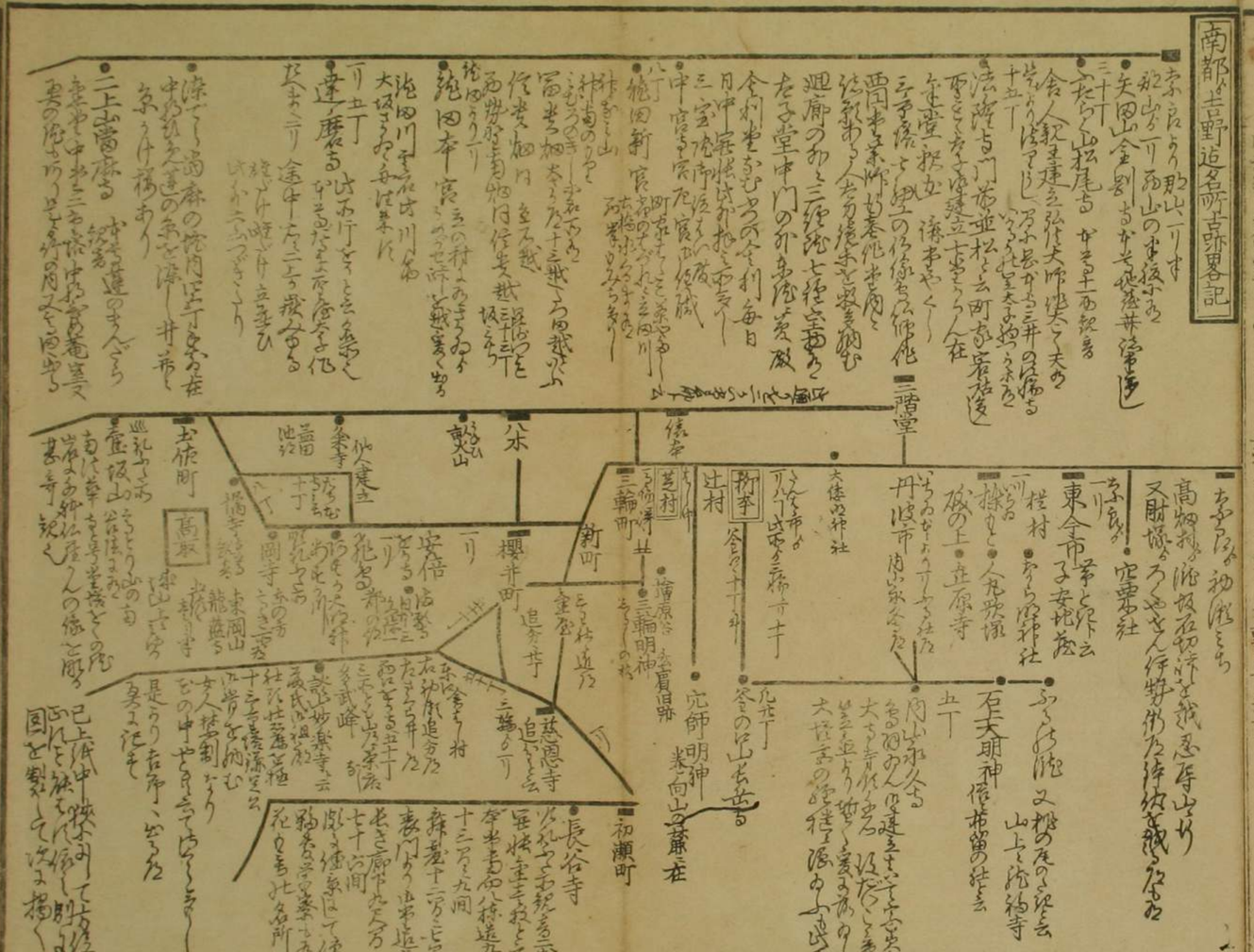
西ハ桂村川ぞし
桂より西ハ西の京
京より竹内



大坂より河内大和巡り路程大略

堺町
堺町
堺町


大和國名所古跡指掌圖
生駒山
宝山寺
長谷寺
横領
春日山
大神山
柳生
石打
伊賀
野道


南都名所吉野迫名所古跡畧記
高畑
東金市
石大明神
初瀬町
櫻井町
新町
高野山
知恩寺
長谷寺
錦部
富田林
春日
山田
平尾
岸和田
牛滝山
岩出
粉河
和歌山
高野山
橋本
大野
紀の川

大和國名所古跡指掌圖

西
東
新庄
新町
竹内
長尾
高田
當麻
岩越
高
行教寺
廣瀬
古宮
田原本
櫻井町
八南
八北
戒重
三王堂
文殊
高取
上市
東吉野
宇陀
土佐町
毛戸
宿綿
木車
今井町
久米
瀬見
田平
橋
岡
八幡
竜在
鹿路
飯塚
倉
細峠
忍坂
宗我
松
赤埴
萩原
名張
長谷寺
黒崎
金
明神堂
穴師
丹波市
布留
石上
天理
櫟本
磯上
桃尾
帯解
長井
竜田町
法隆寺
小泉
郡山
柳町
井筒
横田
横領
追分
畑西
暗峠
生駒山
宮山寺
法華寺
不退寺
海龍寺
般若寺
東大寺
春日山
高畑
佐保
大柳生
柳生
石打
伊賀
月瀬
野殿
水間
北野
遅
狭
上野
長谷
名張
目標
大地
名所古跡
城
陣
寺社
市町
宿駅
村名
道路
川

中も深五里ばかりとかや云ふ細流ハ東の方にあり深谷の所より二ツ屋山の麓を通りて越
後へ出る道ハ沢ふかく大根山中道ハ本街道より吉野
へ越るなり其沢水車ゞ是を水源の所とする民家もひきし
実説面倒の方より越せ坂なりと右ハ沢の坂なれ共又道あり此の降り吉野に出る事ハ
すべて民家ゝ多く越ゆ今ハ二ツハ毒坂なり所々に岩ある故に人馬ハ通ず方越に坂を以上ハ助なり之ハ白鳥信
仰者ハ吉野山南西の方に在花の頃ハ山中ハ吉野町ハ高取の麓つゞき

●吉野へ諸方より道法
京より廿二丁 堺より十七里
奈良より十里 堺より十三里
紀州和歌山へ十七里 高野へ十里 伊勢山田へ廿五里

元大和国中の吉野へ越る小道の坂ハ西武峯ゆ越るを
細峠と云ふ高くけわしく所々に南を望む所あり飛山峯重なり
知られず重なりて高く聳る中に大峰山峯の無数峯高く聳
傾き白吉野山南西の方に在花の頃ハ山中ハ吉野町ハ高取の麓つゞき

吉野山名所案内大概

吉野川 名称佐毋川とも云ふ佐毋川ハ吉野の日本記に見えたり
又吉野ゆ飛鳥ゆ三吉野ゆ八吉野ゆ入式尤吉野ゆ伊勢ゆ流れ入る川なり
巴の関川 此川吉野ゆ大河の水上なりとぞ

六田 むつたの原又むつたの上と称の右川岸ゆ流れる所なり
茶屋あり 実よりよりの小ぶりをかたらふ
一之坂 町の出端より一里の石山の麓伝ひ茶屋道の左右
さゝらの並木又三ツ目の山ゝ谷ゝも都多し
坂なる上十毎ゆ右を建く標とす
十五丁目 一之鳥居 山上参之所 構後分者の石像ゆ今あり
廿五丁目 長峰の茶所 日二行場ゆ近坂のたゞきと
村ゝ義経所義光碑銘文高取儒臣撰 塚山ゆ
●松山の茶亭跡 豊太閤ゆ見の処
三十丁目 ●ゆ〜〜山
多き所一日ゆ中と称又日ゆ
三十五丁目 七曲の半途より峰谷の横を曲ゆ
坂見ゆ坂ゆ坂ゆ谷ゆ右ゆ茶屋あり
三十三丁目 一之橋 又大きゝとも云 掘手銘文豊臣秀頼再修の字
黒門 右ゆ所の黒門ゆ出ゆ家つゞく
ゆ〜〜し松 花の盛りゆ八日ゆ年ゆ出ゆ
茶屋ゆ茶屋ゆ 昔ゆ茶屋を構へ〜ゆ云
日地蔵 日蔵上人の石像と云
沢ゆ毋山 右ゆ沢ゆ沢の上と万葉集ゆ
後の尾坂 山伏より沢の奥静ゆ分捕〜ゆ
銅の華表 ゆ右ゆ三丁目ゆ出ゆ
額 役心門 弘法大師筆

吉野町 名所門左右又義王堂ゆ出ゆ
ゆ右ゆ右ゆ右ゆ右ゆ右ゆ

●本所ゆ一切家 遠如上人建立
丹波村 ゆ右ゆ往ゆ〜〜
ゆ右ゆ〜ゆ伝ゆ
ゆ右ゆ〜ゆ伝ゆ
ゆ右ゆ〜ゆ伝ゆ

軍屋のきつら 昔こゝに軍を構へしとも云
日地蔵 日蔵上人の石像と云
清水山 みつのゝ清水の上と万葉に詠ませし
大滝の四方おろんと音響の四絶の名所なり
後の尾坂 山伏より清の滝神を勧請せし地
鉢乃華表 額象心門弘法大師筆

■吉野町 吉野門内左右又蔵王堂左右にもあり 吉野の町出在右とも書いずれ他にも一級の

客殿は乃至も平屋のやしきの才二級の才二級の才三級いずれも雅趣新奇を金堂 浴室 西厠も変ずるの上の味噌蔵 搗米小屋 味噌蔵 杜鵑 茅葺 花絵 医師 法橋貝 又昔墓さくらの神社を鎮南し
もろ多の巻を示す寛平年八坊の蔵書を住僧に遠持ゝ
仕奉り給ふ信風来もよく 浴室の花乃至示八法歌の坂なども多くの曙の玉釈のさとらず
信しを知むその外書き記 鄰郷八山河を記図 桜林いろは楓の浦を手ふれうるわり
四方桜の家及山上参り此人絵得として間断なく
のの所中ゆくも信ゆるる為八浦る地里信濃
山伏住安を接手安為ゝ

芳野新嘗 五十神祠六十寺都来輪換大伽藍十云
蔵王拝殿 他五石実博ゝ三五ゝ子ゝ 猪ゝの中に名
武百石又傍殿 よ百附く九山のちゝ云て台寺宇也
寺中ふるゝ七十坊 九百坊 九十坊 九十坊 ゝ多
ゝも中比乱世 没収せら 寺院南 山の付 初行 善神
せられ七ふれ 伝ゝ上ふ 記ゝ云

又諸寺社 ゝの付 ゝ再建あり

二王門 尚金剛力士運慶作 他
●金峰山寺 役行者開基
蔵王拝殿 寺南十間四方
なる左右 ゝ動 ゝ式 ゝ人 ゝ作 ゝ
半のあり 揺 ゝ中 ゝあり

●威徳天神社 日蔵上人 ゝ
●実相寺

■吉野山村
●吉水坊

人ゝ左の ゝ二 ゝ拝 ゝ左 ゝ
後ゝ ゝ帝 ゝ
宝物 ゝ
尚 ゝ
尚山 ゝ
住 ゝ
住 ゝ
住

● 安禅寺　飯高山と号す　御蔵王堂在 [illegible]

● 四寺正面堂　山の廻り三丁程

● 又二丁程 [illegible] 川在

● 苔清水　また [illegible] 丁程

● 西行庵室在　西行さくら

山上道是より五里

● [illegible]

又夏箕川 [illegible]

● 國栖の庄

● 大滝

● 蜻蛉の小滝

● 釈の岩屋

● 川上の [illegible]

附録 あをみ芦乃苑

吉野の南ところ川 [illegible]

[illegible]

一下りの説桜を上このは [illegible]

イニ奥之千本共

名護屋 [illegible]

吉野山一望之圖

疊々春山別有天
花開花落鎮依然
可憐萬樹香雲暖
曾護南朝五十年

吉野山一望之圖

疊々春山別有天
花開花落鎮依然
可憐萬樹香雲暖
曾護南朝五十年
賴山陽

歌書よりも軍書尚吉野山
支考

なさとのう
ふ
日比の
秋わすけ
蕉翁

[illegible]
たのもしかな
真空老人

[illegible]
花のよすがら
蓼太

吉野山
[illegible]
鳳朗

吉野山桜咲ぬれば
しら雪かとも
見まがふこの花ざかり
[illegible]
八田知紀

[illegible]
定雅

[illegible]
淡々

[illegible]

花蹊無處著啼鶯
寺寺樓臺鬧戲嬉
杉檜參天春日黑
荒陵誰弔
後醍醐　山陽外史

櫻雲簇々壓嶙峋
妖色異香經雨新
曾為此花留鳳駕
南朝五十六年春
西溟韓中秋

文政壬午春日
雲井
化現無處者啼猿
寺寺樓臺開戲婦
杉檜參天春日黑
荒陵誰弔
後醍醐　山陽外史

櫻雲簇々壓嶙峋
妖色異香經雨新
曾為此花留鳳駕
南朝五十六年春
　　賈鞾中秋

いつまでとむらふてあるめすらん
あくてさてこれさうれしく山
うのもとも及ばぬ恋の玉風小
白雪のあふ英うの〻山
　　玲瓏大人

去歳山風奈及慌苑を
称せる詩歌俳風連句集
をこの代に撰集せらる
載るの輯めて別冊に
著はす又傾聞著作集
近世名家の除と称う紀
しそ寄中乃俗白を
博ものゝ

芳山花時考

そもそも此山の東ハ奥原荘ヲ和泉巡覧記云ル氏山ハ六田の真
榊より東の院まで百町所の名民家ありき所ハ尤名ゝ
並木の樹也又左右の傍も下ハ苔もたれたのゞけあるゆゑ
苔こゝも皆樹多しまれる故あり二三月ハ花の世界と云
間所〻樹ハ苔底多々〻て山ハ高ハ蘚より先
花咲初てやう〻に山ハ咲のかりて奥の院あくまハ
苔密色て中の花密ふ有る中北ハ
千間大やう三十日計又晩樹ハ蘚ふ所こゝ立て出
垂子奥の院の花密の所密ふ開くを初樹ハ高き所あるもあく
咲や北山の樹皆一番ハ山中及民家修坊に樹ハ
殊し色風をけしき年或ハ風西々〻く繁き岩の岩色ハ〻
有ふ多ふ岩て好景あり山陵の田氏四十年ハ今ハ
樹多〻て昔より上おゝ〻又四九此山の北上中下一時ハ不開
と云へども大やう三百年より六十五日中間多所を密ふ最中とす
又里人数人毋間ふも皆如此人ハ仮年の寒温ふ有て遠遠
あり是所より前の樹多き所の内ハ多あ〻る古樹の所り
お前東の方に山の内〻中ハ有る樹の内ハ〻
たの岩乃間まへ〻むひたり右ハ方二十町ばかり一日
ふ〻ん〻ん皆花の林ふ〻ハ〻ろき事〻ハ〻
寓れあきたのハ〻ひさ〻ろ〻ふ〻ひきあ〻〻此所岩乃
とふ〻ろく〻ふ〻きふ〻ろびるふ〻ふ世此ふの抽ふ〻と

ふ〻〻ふ〻ふ〻樹ふ〻雲ふ〻きふ〻ふ〻〻山ふ
〻ふ〻ふ〻ふ〻又岩ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻
あるふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻
ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻
ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻
ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻ふ〻

[illegible]

[illegible]

[illegible]

十二月

一元禄元年歳次戊辰二月（1688年3月5日～4月3日）盛 [illegible]

一元禄二年己巳二月十九日（1689年3月25日）盛 [illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

一慶長十二年丁未四月三日（1607年5月11日）盛 [illegible]

一寛喜十二年壬午四月三日（西暦一二三〇年五月十二日）

盛海蓮法師

道之記と云ふ事に云ふ所の長川氏様の所にて多人の歌をとりあつめ
たるを一やもとゝぬ事をみとりて花一えだ也二日
四月はじめより奥へむかふ七日の夕方にはたより結
びしまつこゝろあく宮やまあくとはたのもしく
こゝろもとなくたのもしくふるむかしのたよりふるもゆかしく
とゝまるものこゝろ結ぶとはよひをひとゝ夜ふとゝまるぬれば二日
今井を立て云ふ二の坂をのぼりつゝふる花やこゝろふる所
山はいつもよりやゝちかく山もあらはれけるんかもあくあり
長峰をのぼりつゝ

いつくとなきうぐいす海ちかく山のちかくなりにけり

ちゝとの橋を

ゆくすゑよりこゝろもとゝ此山のちかくなりにけり

あられ四日云ふ此橋渡ふ所にてやゝとてなもの所神おく
いもせのやうの奥ふかく紅いまゝ咲さかるより人ゝ中あつとゝ
より安禅寺をいとゝ人家もあるく宗寂の地あり世をいとゝ
もくとゝのあつうちらんをなかの宮ゝさくらや咲ゆるふる
若葉水まさて山散たつゝ行くゝ

たつなきハ人ゝとゝ所ゝ若葉ゝ川とゝぬ渡ゝこゝろあれも
きのふふんゝちゝとの橋の渡ふ所く我いやゝまんとゝゝ
さをとりて所の板をきてふれい所ゝやちゝとゝ
いつのまに風のさゝひきのふんゝちゝとの岳ふふもあ

まよりなもゝゝの常もうれちりをゝぬ

おくもきのふとひゝ先ゝとゝもゝやゝ

一明和七年庚寅三月廿一日（西暦一七七〇年三月十一日）

散京師人上柳義啓

紀行曰自上市渡吉野川過飯貝二里始到吉野里所謂千本櫻
者在里西端二溪悉櫻樹自飯貝而来即途次所経望之果如前
言嫩葉微緑菁葱彌目無復一點残芳矣聽主人之語則云今春
花候太早十四五日方盛會風雨暴至飄落都盡此地櫻花皆
單辨細花蕊最早落太晚遇風雨掃為空如今春花絶開便
風雨却掠雖土人亦不見其盛也云々

一明和八年辛卯二月八日（西暦一七七一年三月二日）

散本居宣長大人宿

ようゝ聖のうちも橋のおかうのもきりとゝもゝふるぎんさも
ゝりぬ爰ゝ見西る所あるをゝれてゝをこの者ゝこの所るゝ山やゝ
けるる名をつきんとゝと公づ記ふゝゝ山大ゝゝ塞ゝもゝぎく
今ハ爰りありきる橋どもぞむらきえ者ゝる雲ゝもこのきゝて
所ゝふんゝ者ゝるそもゝく此山の花ハ出ゝ三日より六十五日ふあゝ

花候太早、十四五日方盛、會風雨暴至、飄落都盡、此地櫻花皆
單辨細花、最早落、太晚遇風雨、一掃為空、如今春花絶開便
風雨劫掠、雖土人亦不見其盛也云々

一明和九年壬辰二月八日（西暦一七七二年三月二十七日月曜）　散　李花宜長公嘗
著記、如左、ようしのうちも横のおかうのおきりとおもひてたゝ
みをりぬべく、又西の所なるをこれてふをこの老のちる山やし
けるなるつきんとへとゝ、ぶ花ふ〳〵むかし、蜜ゝも、紀く
今〳〵、ぬりぬりきるゆ、ゞとも、ぞむらきえ、きる雪、ゝもこ、て
所〳〵ふ、、、きるそもく、此山の紀、出、、日より、六十五日ふあ、
るところひもんつまのとこ〳〵もちうあると世ゆいふめん
とゝ、ゞ國人のきそ、ゝ、つるどゝふとひ〳〵ふ、のゆ、ろ世、るを
の程を、、こに、ゆきほと、ゆ、こ、ゆ、ゆ、ゆ

個雲林畫法既而渡川號柳津過六田登第一阪多櫻所謂六田之花也高低十里許出岡上排行数百櫻樹所謂長峯之花也徐徐進歩路如張弓弦則洞也洞中織密栽櫻殆二至千株千株之上後眺長峯前望遠景殆目本之花實為海内勝境其名不誣想千株茶店芳野街口也

中畧入櫻本房而宿焉三日乃賞花一望千株又曰今茲余入此山居七八日細研究花之情大槩晴明後五六日六田花發芳野次之奥院又次之櫻有早晩花期不齊無日不華夫六田至奥院大凡四十餘里岡上溪間園林龍圃或儔列或孑立或雲如集或星如散有鮮白者有微帶桃紅者有專花者有嫩葉雜花者碧樹之間菜花之上無地不栽櫻無處不見花仰則疑雲俯則訝雪遠望近試景色隨顧歩而轉風光趁時日而移正是一般錦世界殆非人間之有矣蓋櫻者山霊所愛之樹而土人敬而護之花尚不摘而況敢伐乎山中厳禁剪伐表干官榜然櫻有榮枯時運所致以古檢今櫻樹稍減前賢已論之土人亦知之近来相議結社年年栽櫻苗二千株以賽山霊珍重如此且此山上適櫻種櫻種不擇美悪移来栽之不俟三年品格豹変世以為第一甲品矣又記中多武峯之条云多櫻樹花信未到「背面美人多所思嬌情別是有嫌猜須知恨較芳山樹靳固花心不敢開」掌閑此花候此芳野畧同今觀此光景思惟百端遂到西門生計先取高野経二三日而後探芳野是為上策云尚書序秦鼎翁曰花猶光父客猶孺子以三月往寝臥樹下以待之必得其所欲故管子能得預前之道者也有尋花者必來取法一文政二年己卯三月廿四日 七峰二勝前記 散江戸人海老名蘭斎遊嚢日録云抵芳野山麓屋鱗次四山之櫻皆單辨花候已過不能窺其美是可憾耳及中臺櫻最多名曰覽千株益不勝遺憾云々 按もろに成齋翹齋遊時を等しくして同花を不同あるべきの如し

以上余の机邊に在る所の古人記り中より芳山登覽の日を抄出し其年の蕃暦をそつく一こゝに之を按考するに文中の花筵二三丈あり六十日計り盛のよし也あれは又八十日に及んで枝末しきりもつんくとなる年の意暖まるて不同あり故に花期その星人もえさるあめぬるゝあるみをもつて記されしなるそよろしく無不日の遠ひろてはこの紀樂載ゆ成齋居士の尋芳紀の法を倣ふく誤しめ立春六十日前後より朝小生ようく南都細脚或いる杖根末拯よ遊歴しみかの蕃暦を同金毛ちに登山を始とし余も今春八世紳を脱て野山を探ひ〜う蕃暦を計り年ひ

茲の蕃暦を約金毛ちに先年を数もる前謂春山を探ひ長乗ちる蕃暦を紀を蕃ひしよ頃ちあふ俗ちて彼蕃暦ちも山櫻も一時に綻ひ如浮雲西山を望む嵯峨の花もさや遠眺二三中咲ちれい蕃暦をよふよ以ひ余も今春八く一面ゆ花線をく〜ふ浪華ちう也ちよ捷徑をちんと欲ふ

此帖余嘗遊芳山行李中之手錄也柳原忠告一見喜之漫題花栞欲公諸世余曰是所謂去歳之栞而故紙耳恐誤他探春之客蹤宜俟再校矣忠告請而不已遂鏤櫻木鳴呼余愛花而却禍花又豈得不山靈嗔之乎乃跋而與焉　巳酉元旦　饕霞小僊

洛下隱士　津久井飄々子手錄

明治三十九年一月三十九日
水谷弓彦氏寄贈

全

井上如雲齋淨書
岡田湖林堂精刊

嘉永二年巳酉春二月吉日開板

發行書林

京　竹原屋好兵衛
同　平野屋茂兵衛
同　山城屋佐兵衛
同　越後屋治兵衛
同　河内屋儀助
大坂　心齋橋筋北久太郎町北ヘ入　河内屋喜兵衛壽梓
同　和泉吉埜山金鳥居内　福知屋紋之丞

全　弘所